

第3章 小竹下宮尾遺跡の調査成果

第1節 遺跡の概要

1 遺跡の立地(第4・5図)

小竹下宮尾遺跡は、大山北麓から派生する丘陵上に所在する。丘陵は、大山北麓が多数の中小河川による侵食を受け、放射状に開析されたことにより形成されたものである。調査区の標高は46～47.5mで、北方へ広がる日本海へ向けて南北に緩やかに傾斜する地形を示す。一方、丘陵の東西は急峻な勾配となり、谷地形を呈する。

調査前の現況は畑地である。調査区一帯は開発により平坦となり、開発以前の地形を推し量ることは難しい。ただ、調査地から100m程度北の丘陵北端は雑木林となっている。

2 基本層序(第6図)

調査区内の堆積については、調査区北壁・南壁にトレンチを設定したほか、SK 8の壁面を利用し基本層序の記録を行った(第7図)。以下、その概要を述べる。

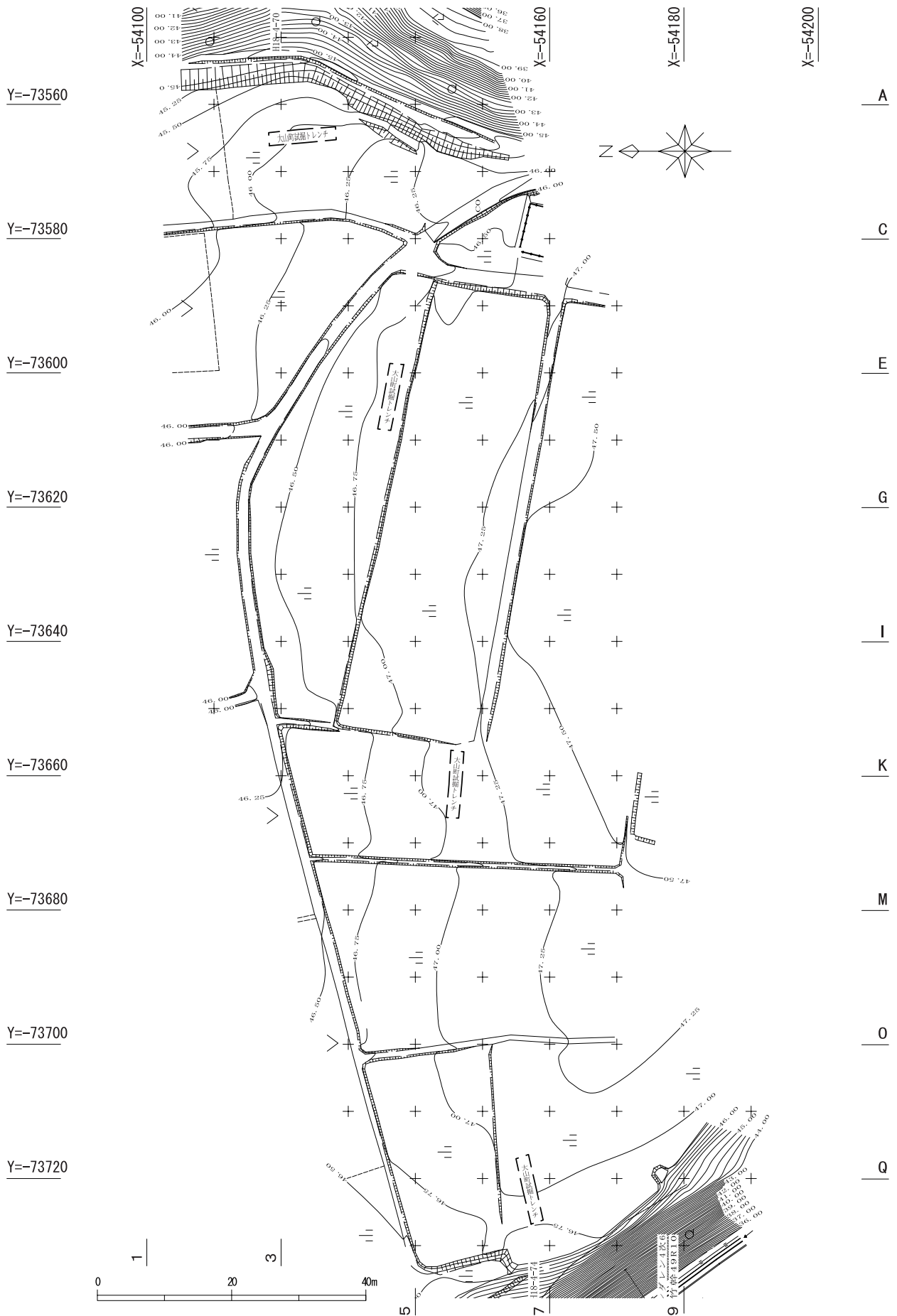
表土は調査区全体に20～30cmの厚みをもって堆積する。根による攪乱、土壌化が著しい。

I層：黒褐色土(10YR3/2)。表土下に堆積する。第7図におけるE～Oライン辺りに堆積が確認され、調査区東・西端付近ではみられない。全体的に土壌化が進行し残存状態は不良である。検出した遺構埋土の多くが当層に由来するとみられ、かつては旧地表面を形成していたと考える。

ただ、調査区西側検出の遺構(SI 2、SB 2・3、SK 7)埋土は暗褐色を呈し、当該箇所周辺に



第4図 調査地周辺の地形



第5図 調査前地形測量図

は堆積していなかった可能性がある。

II層：にぶい黄褐色土(10YR5/4)。大山上部火山灰であるホーキ層、もしくは始良 Tn 火山灰(AT)に由来する二次堆積と考えられる。I層の遺存が不良なため、当層上面が主要な遺構検出面となった。

III層：黄橙色土(10YR8/6)。乳白色を呈するローム層である。

IV層：黄橙色土(7.5YR7/8)。橙色を呈するローム層。粘性が強く、よく締まる。

V層：明黄褐色土(10YR6/6)。

VI層：明黄褐色土(10YR7/6)。色調はV・VII層の中間的な様相を示す。

VII層：浅黄橙色土(10YR8/4)。VI層よりもやや白みがかかる。

VIII層：灰白色土(10Y8/2)。

IX層：浅黄橙色土(7.5YR8/6)。

X層：浅黄橙色土(10YR8/3)。下位の岩盤(XI層)に由来する小礫を含む。

XI層：灰白色礫層(10Y7/2)。岩盤。検出された遺構のうちSK 8は当層上面まで掘削が及ぶ。

47.4m

遺構検出面 ▶

表土
I 黒褐色土
II にぶい黄褐色土
III 黄橙色土
IV 黄橙色土
V 明黄褐色土
VI 明黄褐色土
VII 浅黄褐色土
VIII 灰白色土
IX 浅黄褐色土
X 浅黄橙色土
XI 灰白色礫層

0 1m

* 記録地点は遺構配置図(第7図)参照

第6図 基本層序

3 調査の概要(第7図)

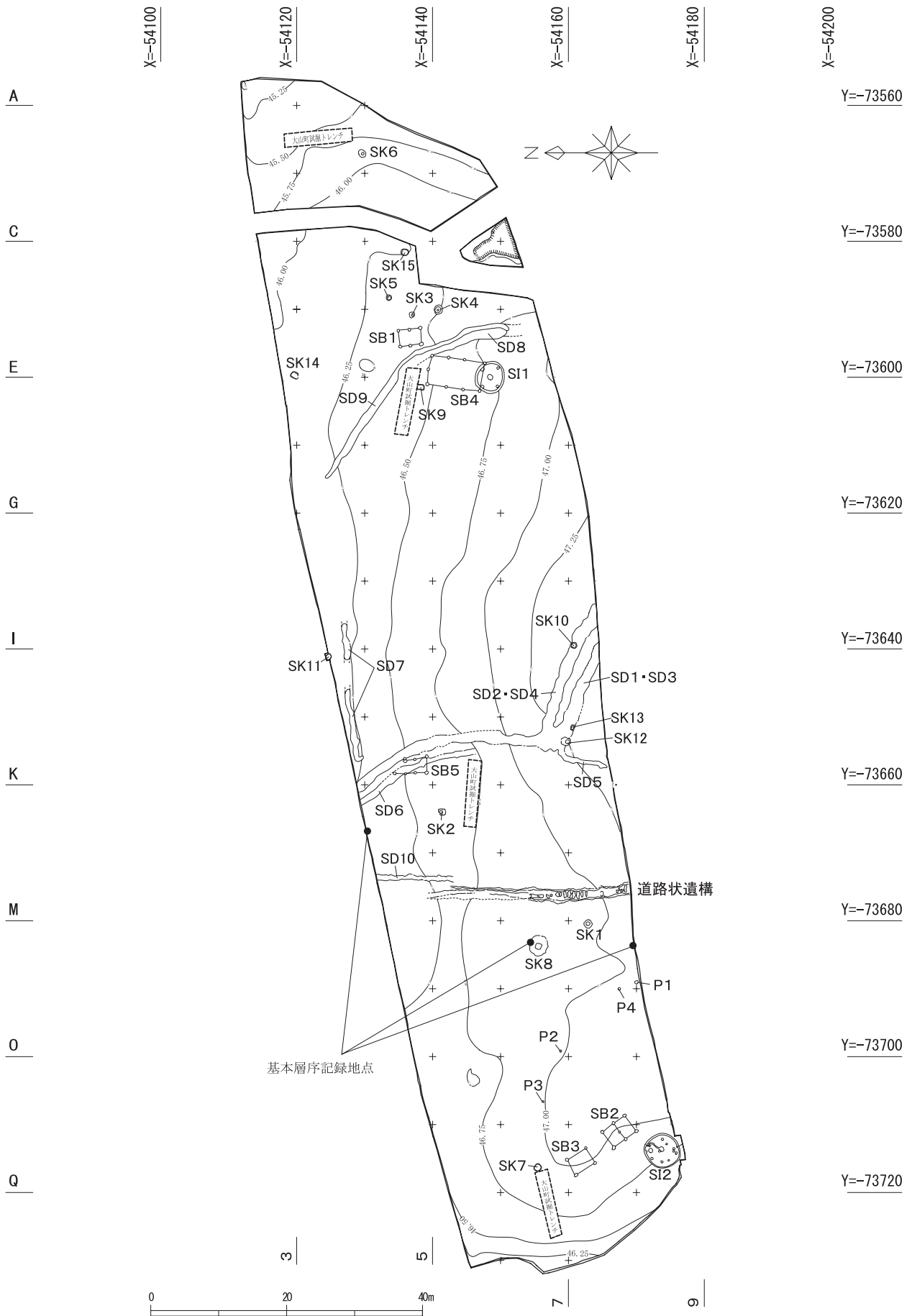
小竹下宮尾遺跡では、竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡5棟、道路状遺構1基、溝10条、土坑15基、ピット4基を検出した。全般に出土遺物は少なく、帰属時期が不明な遺構が多い。竪穴住居跡2棟は弥生時代後期後葉に帰属する。また、SK 8では上層からの出土ながら、弥生時代後期後葉の土器が多数出土している。道路状遺構では埋土中から土器が出土し、平安時代(9~10世紀前後)に属する。両時期ともに調査区及びその周辺に集落が存在することが明らかとなった。ただ、本調査における出土土器は上記の弥生時代後期後葉、平安時代のほかはまとまった出土がなく、他の時期については様相が不明である。

表1 遺構名新旧対照表

新遺構名	旧遺構名
SI 1	SI 1
SI 2	SI 2
SB 1	SB 1
SB 2	SB 4
SB 3	SB 5
SB 4	SB 3
SB 5	SB 2
道路状遺構	SD 1
SD 1	SD 2
SD 2	SD 3
SD 3	SD 5
SD 4	SD 6
SD 5	SD 7

新遺構名	旧遺構名
SD 6	SD 4
SD 7	SD 11
SD 8	SD 12
SD 9	SD 8
SD 10	SD 10
SK 1	SK 13
SK 2	SK 8
SK 3	SK 6
SK 4	SK 11
SK 5	SK 14
SK 6	SK 5
SK 7	SK 12
SK 8	SK 9

新遺構名	旧遺構名
SK 9	SK 7
SK 10	SK 1
SK 11	SK 4
SK 12	SK 3
SK 13	SK 2
SK 14	SK 10
SK 15	SK 15
P 1	P 1
P 2	P 2
P 3	P 3
P 4	P 4



第7図 遺構配置図

第2節 調査の成果

1 竪穴住居跡

SI 1 (第8～10図、表4・10・12、PL.2・3、21・22)

D～E5グリッド、調査区南東側の標高46.7mに位置する。I層上面精査中に確認した遺構である。

平面形は長軸4.7m、短軸4.3mの歪な円形で、床面積は13.1㎡、検出面からの深さは最大36cmを測る。

本住居では、床面南側において周壁溝が2条検出された。溝の先後関係を検討した結果から、床面積の拡張が行なわれたと判断したが、この拡張が住居の建て替えに伴うものかどうかは不明である。その他、P3・4周辺では貼床が施されているのを確認した。

主柱穴はP1～4の4本柱である。主柱穴の位置は、P2・3が床の拡張によって若干壁から離れるものの、P1・4は壁面に近接し、周壁溝と接する。柱間距離は、P1から時計回りに2.4m、2.3m、2.3m、2.7mである。P2・3では柱痕跡と考える堆積を確認しており(⑬層)、柱径は15cm程度と推測できる。主柱穴ではいずれも裏込めと考えられる堆積が認められ、土層断面からは数回に分けて土を詰めた様子が窺える(⑨～⑫・⑭～⑯・⑱～⑳層)。裏込めにはI・II層に由来する土から成る混合土が使われ、この裏込めの最上層は特に固く締まった土である(⑨・⑱層)。

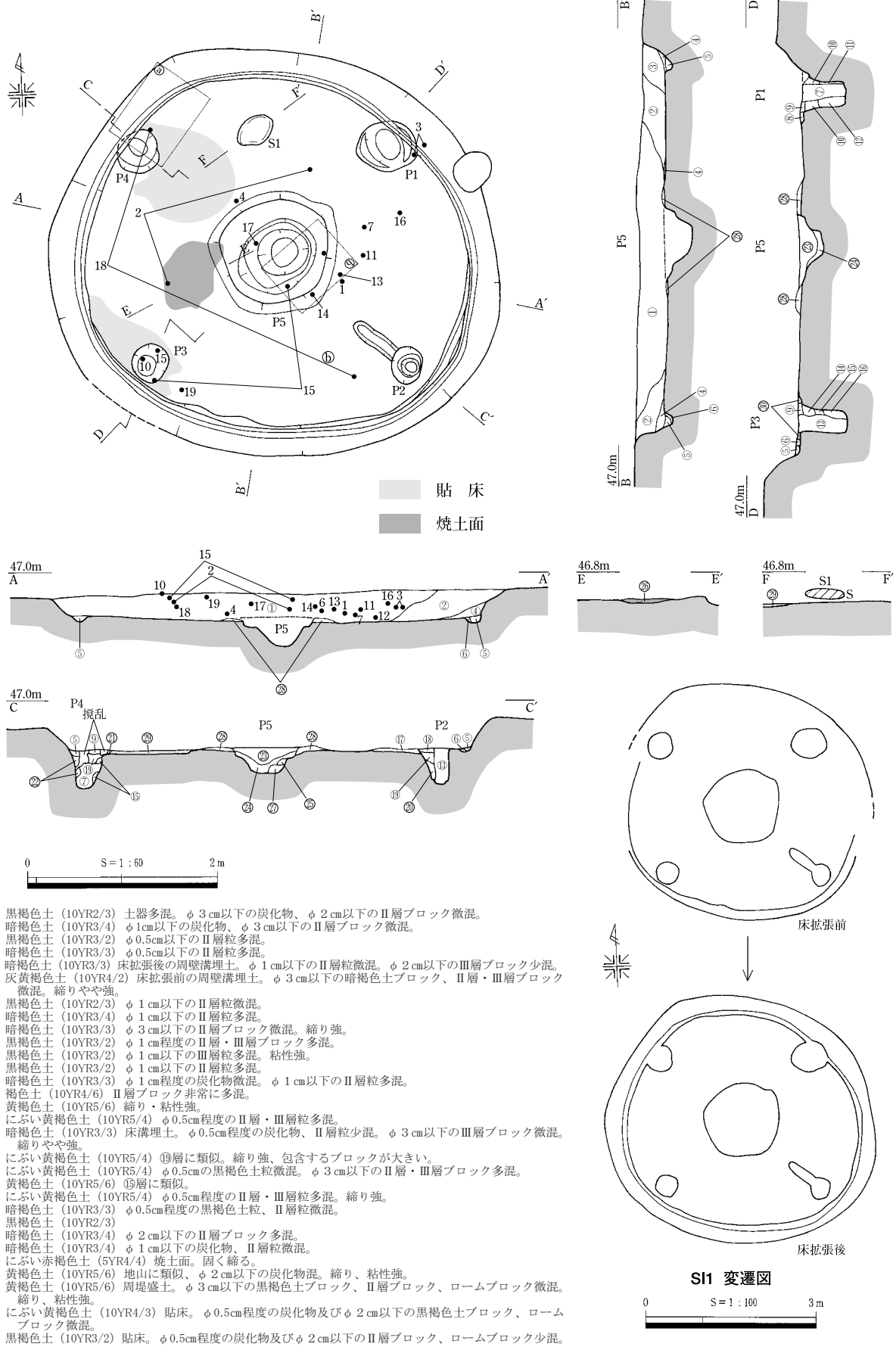
中央ピットP5は長軸65cm、短軸55cmの不整な円形を呈する。P5の肩部に沿って幅38cm、床面からの高さ4～6cmの周堤が巡っており、この周堤は主にI・II層に由来する土より成る盛土である。P5の内側は二段掘りになっている。P5南側の埋土には、締まりの強い粘質土(㉗層)がピット掘り方の壁面付近に認められ、㉗層でピットの形を整えた後に利用していたか、或いはP5を㉗層で埋めた後に再度掘り直した可能性も考えられる。このような粘質土の埋土は後述するSI2でも確認した。また、P5下層の㉔・㉕層は住居埋土と色調が異なっており、住居廃絶以前に既に堆積していた土の可能性もある。

その他の床面施設としては、床溝を1条検出した。この溝は、P2から住居の中央に向かって50cmの地点で途切れるもので、溝の底面レベルに高低差はほとんどない。掘削時期は不明だが、埋土の特徴が床面拡張後の周壁溝と類似しており、同時期に機能を停止した可能性がある(⑤・⑰層)。被熱面はP5西側にあり、一部は周堤上にも広がる。この被熱面は、床面から最大2cm盛り上がるような状態で検出した。

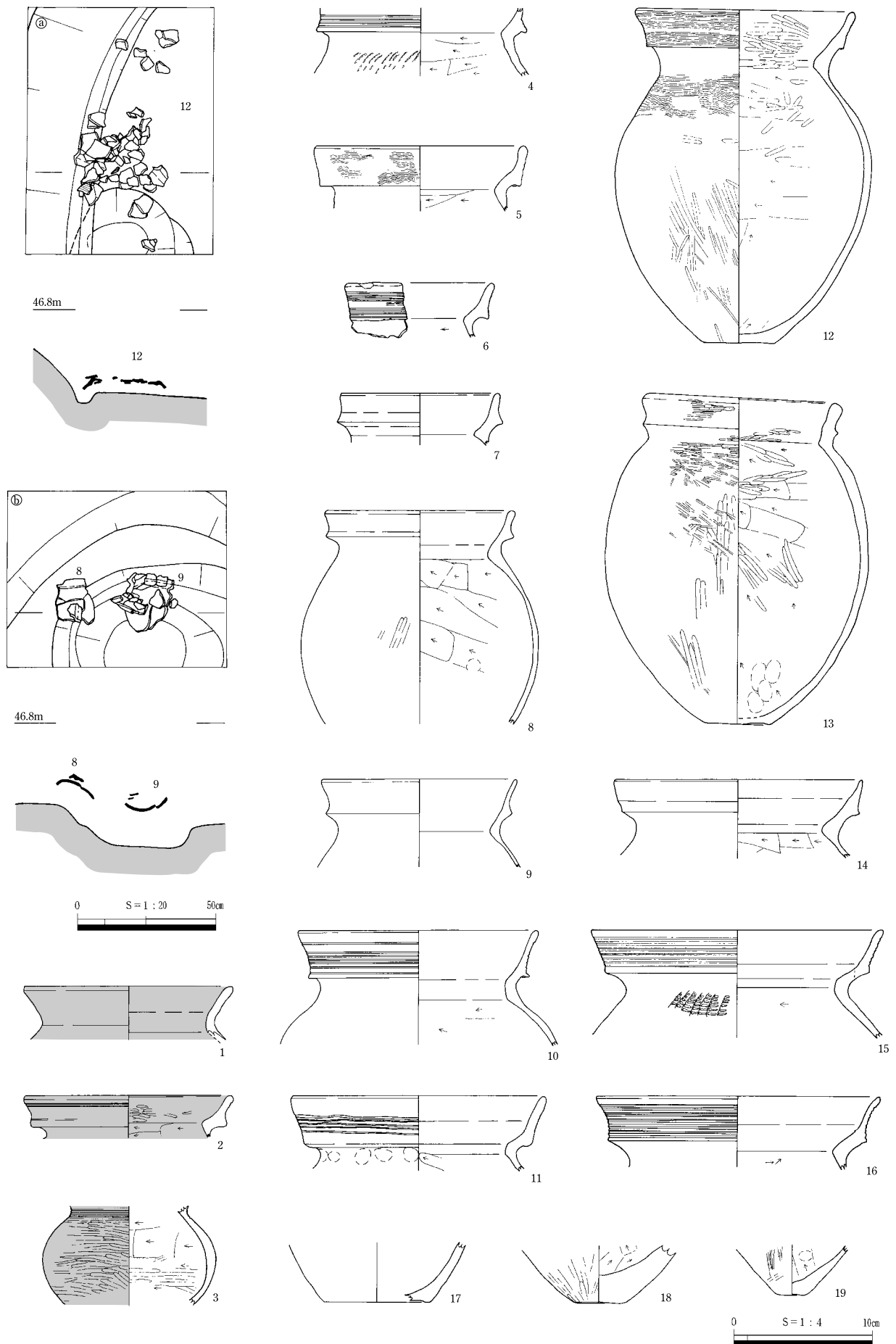
住居埋土は黒褐色土を主体とする。自然堆積による埋没と推定できるが、①層中には、完形に復元できる土器を含め大ぶりの破片が含まれていた。3cm以下の炭化物も混入しており、これらは住居廃絶後しばらく経った後に廃棄されたものとする。

図化した遺物は壺(1～3)、甕(4～16)、壺又は甕の平底(17～19)、台石(S1)、被熱礫(S2)である。床面直上の出土遺物はないが、このうち、S1は水平な状態で出土し、下にわずかに黒褐色土が入りこむものの、廃絶直後の位置をほぼ保っている可能性が高い。8・9・12は周壁溝及びP5埋没後に廃棄されたもので、出土した土器のうち、比較的早い段階に廃棄されたものと推測する。

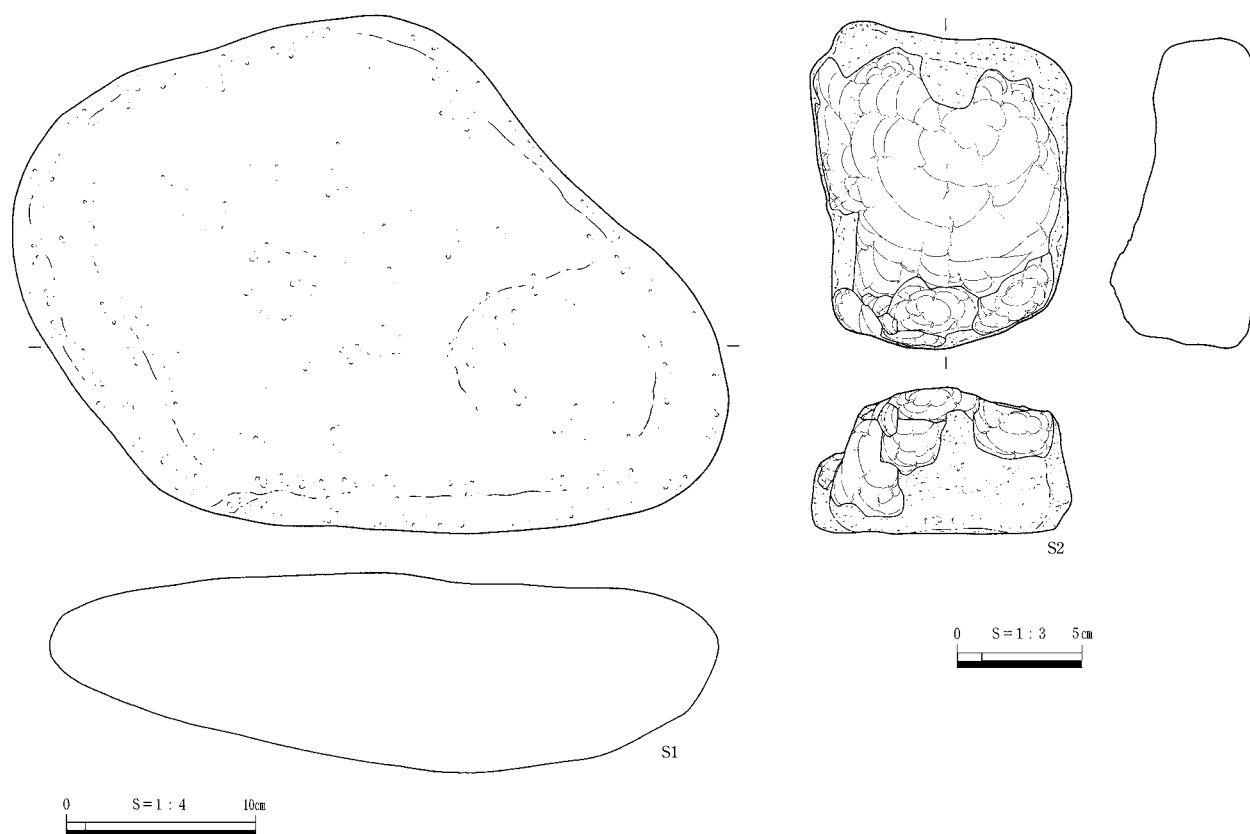
土器19点はいずれも胎土の特徴がよく似るもので、内面のケズリ調整は頸部に達する。このうち、壺は全て赤彩が認められ、口縁部の形状は、素口縁(1)、複合口縁(2)がある。甕の口縁部の形状は、上端が長く拡張する複合口縁で、やや直立気味なものと同外傾するものがある。このうち、口縁部がやや直立気味な甕には、口縁帯が直線的で下端がわずかに下垂するもの(5)、口縁帯がやや外反し下端



第8図 SI1(1)



第9図 S1(2)及び出土遺物



第10図 SI 1 出土石器

は横方向に張り出すもの(4・7)がある。口縁部が外傾する甕のうち、口縁帯が直線的なものには、下端がわずかに下垂するもの(11・12)、下端が横方向に張り出すもの(14)、下端がほとんど拡張しないもの(15)がある。口縁帯がやや外反するものには、下端がわずかに下垂するもの(6)、下端が横方向に張り出すもの(8～10・13)、下端がほとんど拡張しないもの(16)がある。口縁帯外面に施された文様は、5に波状文が認められ、その他の甕には、不明瞭なものを除き多条平行沈線が確認できる。

台石(S1)は扁平で大型の楕円形礫を利用したものである。敲打痕や擦痕などの使用痕は認められない。S2は、表面を中心に被熱しハジケが認められる礫である。石器として使用したものかどうかは不明だが、本稿では被熱礫として報告することとした。同様な被熱礫はSB1からも出土している。

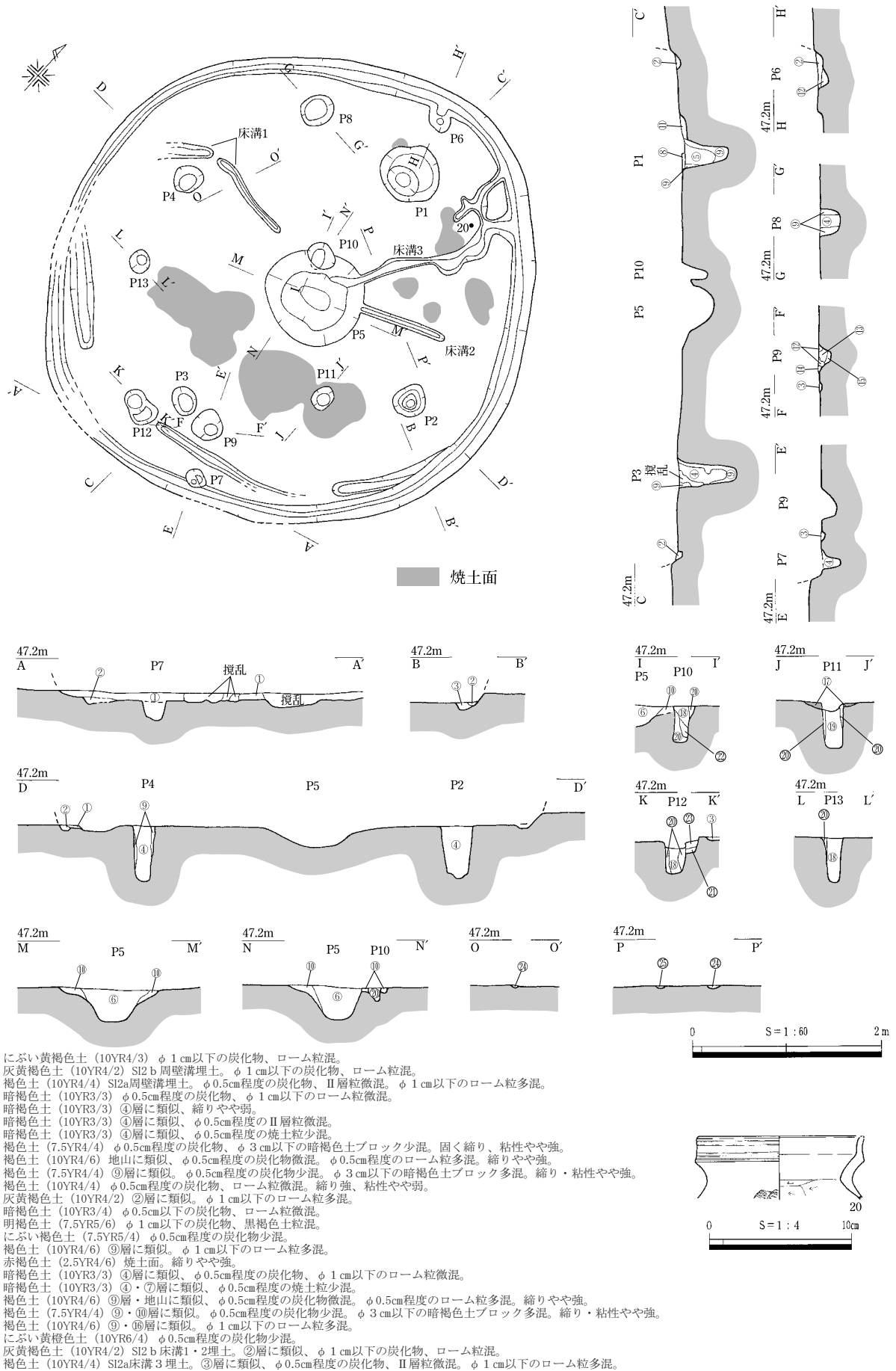
出土遺物の特徴から、本遺構の埋没時期は弥生時代後期後葉と考える。

SI2 (第11・12図、表4・12、PL.4・5・23)

P8グリッド、調査区南西側の標高47mに位置する。ここは丘陵の西縁辺部にあたり、付近にはSB2・3が立地している。SI1からは西に110mの地点にある。

本住居周辺は耕作土下にII層が露出していた。そのII層上に被熱面を確認し周囲を精査したところ、周壁溝2条と、これらの溝に囲まれるようにして床溝3条、ピット13基、被熱面7カ所を確認したことから、竪穴住居跡として調査を進めた。住居の壁体部分の大半は後世の削平を受けて失われており、溝やピット以外の埋土を確認したのは南壁際の一部のみである(A-A'ライン)。

さて、本住居では、床面南側において、周壁溝を2条検出したことから、上屋の建て替えを想定した。この建て替えが拡張か縮小かについては、周壁溝の先後関係を検討した結果から、拡張と判断している(B-B'ライン)。以下、本稿では建て替え前をSI2a、建て替え後をSI2bとし、時期の古い



第11図 SI2及び出土遺物

順に述べていきたい。なお、本住居の主柱穴は、ピットの位置関係及び底面レベルなどから推測すると、P1～4の4本柱と考えられ、SI2a・bで共有していた可能性が高い。また、中央ピットP5の埋土では、SI1同様に、締まりの強い粘質土(⑩層)を確認しており、この⑩層がP5のピット掘り方の壁面付近に認められたことから、⑩層でピットの形を整えた後に利用していたか、或いは、SI2b建て替え時に、P5を⑩層で埋めた後に再度掘り直した可能性があると考ええる。

SI 2a

残存する周壁溝から推定される床面の平面形は、長軸5m、短軸4.7mほどの円形となる。SI2a時における中央ピットP5の規模は、長軸1.1m、短軸1mの円形である。SI2aに伴うものとしては、他に床溝1・2が挙げられる。床溝1・2はP5の東西に検出した溝で、埋土の特徴がSI2a周壁溝の埋土と類似しており(②・④層)、建て替え後には機能を停止していた可能性が高い。床溝の底面レベルは、床溝1がほぼ一定であるのに対して、床溝2ではP5に接する部分のレベルが低く、両端の高低差は3.7cmを測る。

SI 2b

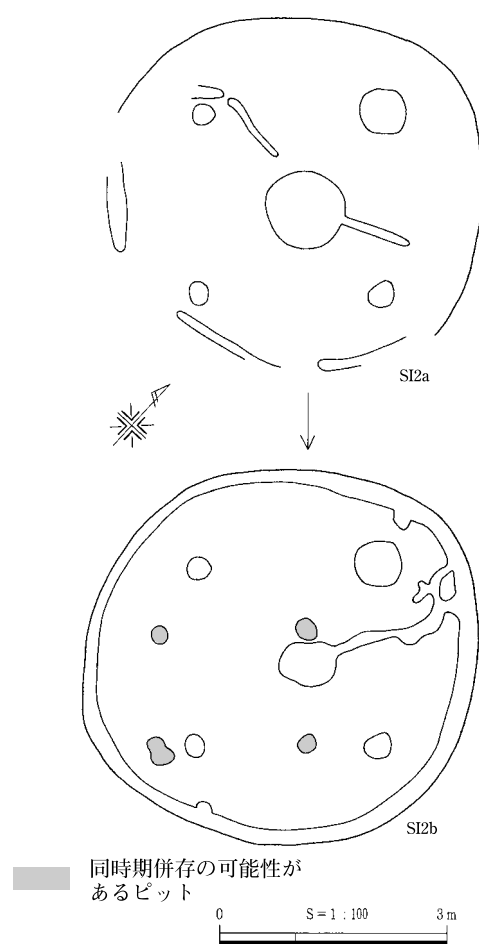
周壁溝から推定される床面の平面形は、長軸5.5m、短軸5mの円形で、床面積は21.2㎡である。

主柱穴P1～4の柱間距離は、P1から時計回りに2.4m、2.4m、2.4m、2.3mを測る。床面からの深さは48～62cm、底面レベルは標高46.1～46.2mである。主柱穴では柱痕跡と思われる埋土の堆積状況は認められない。主柱穴の平面形は円形で、P1が径64cmと大きく、他の3基は径30～36cmほどである。P1は二段掘りようになっており、柱の抜き取りが行なわれピットの掘り方が広がったのかもしれない。中央ピットP5の規模は、SI2a時に比べて縮小し、長軸78cm、短軸58cmの楕円形となる。床溝3は、周壁溝とP5を接続する溝で、壁から40cmのあたりで二股に分かれている。P5⑩層の上面に掘られており、この溝の底面レベルはほぼ水平である。P7は、周壁溝に接する浅いピットで、柱痕跡は認められないが、補助柱的な機能をもつものだろうか。P5をはさむように相對するP6とは一対のもの可能性がある。

被熱面は、住居北東部のP1から床溝3付近と、南東部のP11からP3付近の2カ所に集中し、P1・11とは重複している。被熱面積は南東部の方が広く、被熱は上面から3～6cm下まで及んでいる。

遺物は、床面直上から甕の小片(20)が出土した。20の口縁部は直立ぎみで下端はほとんど拡張していない。口縁帯はやや外反し、外面には5条以上の平行沈線が施される。これらの特徴から20は弥生時代後期中葉～後葉に比定される。

ところで、本住居で確認した残り6基のピットについては、住居埋土の遺存状況が悪かったために住居との重複関係を確認できなかったことから、本住居に伴わないピットを含む可能性が残る。この



第12図 SI 2変遷図

うち、P10～13は、平面形は径22～30cmの円形で底面レベルが標高46.2～46.3mと近似し、その配置からも4基一組のピットと考えるもので、P10は中央ピットP5の⑩層を掘り込み、P12・13が住居の支柱穴よりも西寄りの壁際に位置する。本住居に伴うとすると、P12の位置から、SI2b段階のものと推定できる。また、これら4基のピットについては桁行1間、梁行1間の掘立柱建物の可能性も否定できない。建物とすると、主軸方向はN-41°-W、柱間距離はP10から時計回りに1.5m、1.9m、1.7m、1.9mで、平面積は3.1㎡となる。

以上をまとめると、SI2aからSI2bへの変遷は第12図のようになる。出土遺物から、SI2bの帰属時期は弥生時代後期中葉～後葉と考える。

2 掘立柱建物跡

SB1 (第13図、表4・10・12、PL.6・23・33)

D4グリッド、標高46.4m付近に位置する。表土下、Ⅱ層上面検出の遺構である。

桁行2間(3.7m)、梁行1間(2.9m)の建物で、平面積は7.8㎡である。主軸はN-9°-Wとやや西に傾き、隣接するSB4とは軸の方向が異なる。側柱はP1～6の6基で、柱筋はP2がやや内側にあるもののほぼ揃う。柱穴の平面形は長軸42～56cm、短軸38～46cmの不整な円形を呈する。検出面からの深さは最大80cmに達し、底面レベルは標高45.6～45.7mに収まる。P2底面には、柱のあたりと思われる径15cm程の窪みが残る。柱掘り方埋土にはⅠ・Ⅱ層由来の土から成る混合土が使われ、P6の土層断面からは数回に分けて柱の周りに土を詰めた様子が顕著に窺える(⑤・⑧・⑨・⑪～⑭層)。柱痕跡は認められないが、P1・3・4・6では柱抜き取り後の流入土と思われる堆積(②～④層)を確認している。

遺物は、P3から不明棒状鉄器(F1)、P4から甕(21)、被熱礫(S3)が出土した。F1はP3④層からの出土で、最大厚0.5cmとやや薄手の棒状品である。両端は欠損し、特に上半分は端部が掘り切られたように歪んでいる。断面の形状は上半部が長方形、下半部は方形に近い。21は④層上部に斜めに落ち込むようにして出土した。21は口縁部上端が拡張、外傾するもので、口縁部下端に拡張は認められない。口縁帯外面には14条の平行沈線が施される。以上の特徴から21は弥生時代後期後葉に比定できる。S3は④層から出土した被熱礫の破片で、この割れが被熱によるものか、加撃によるものかは不明である。背面は著しく被熱し、赤～黒変するとともに、ハジケが認められる。

遺物は柱抜き取り後の混入であり建物機能時期を示すものとは言い難いが、21が弥生時代後期後葉に比定される点、柱掘り方埋土の様相がSI1とよく似ている点から、本遺構の埋没時期は弥生時代後期後葉の可能性はある。

SB2 (第14図、表12、PL.7)

O・P7グリッド、標高47m付近に位置する。表土下、Ⅱ層上面で検出した遺構である。

本遺構周辺は丘陵西側の縁辺部にあたり、建物の主軸は等高線に並行するようにN-38°-Wをとる。北西方向に3.2m離れた地点にあるSB3とは軸をほぼ同じくする。SI2とは距離2mと近接する。桁行2間(4.8m)、梁行1間(3.4m)の建物で、平面積は12.1㎡である。

側柱はP1～6の6基で、柱筋はP2がやや外側にあるもののほぼ揃う。柱穴の平面形は長軸46～64cm、短軸40～44cmの不整な円形を呈する。ピットの検出面からの深さは56～78cm、底面の標高は46.2～46.4mを測る。柱掘り方埋土はⅠ・Ⅱ層由来の土から成る混合土が使われ、数回に分けて柱の周

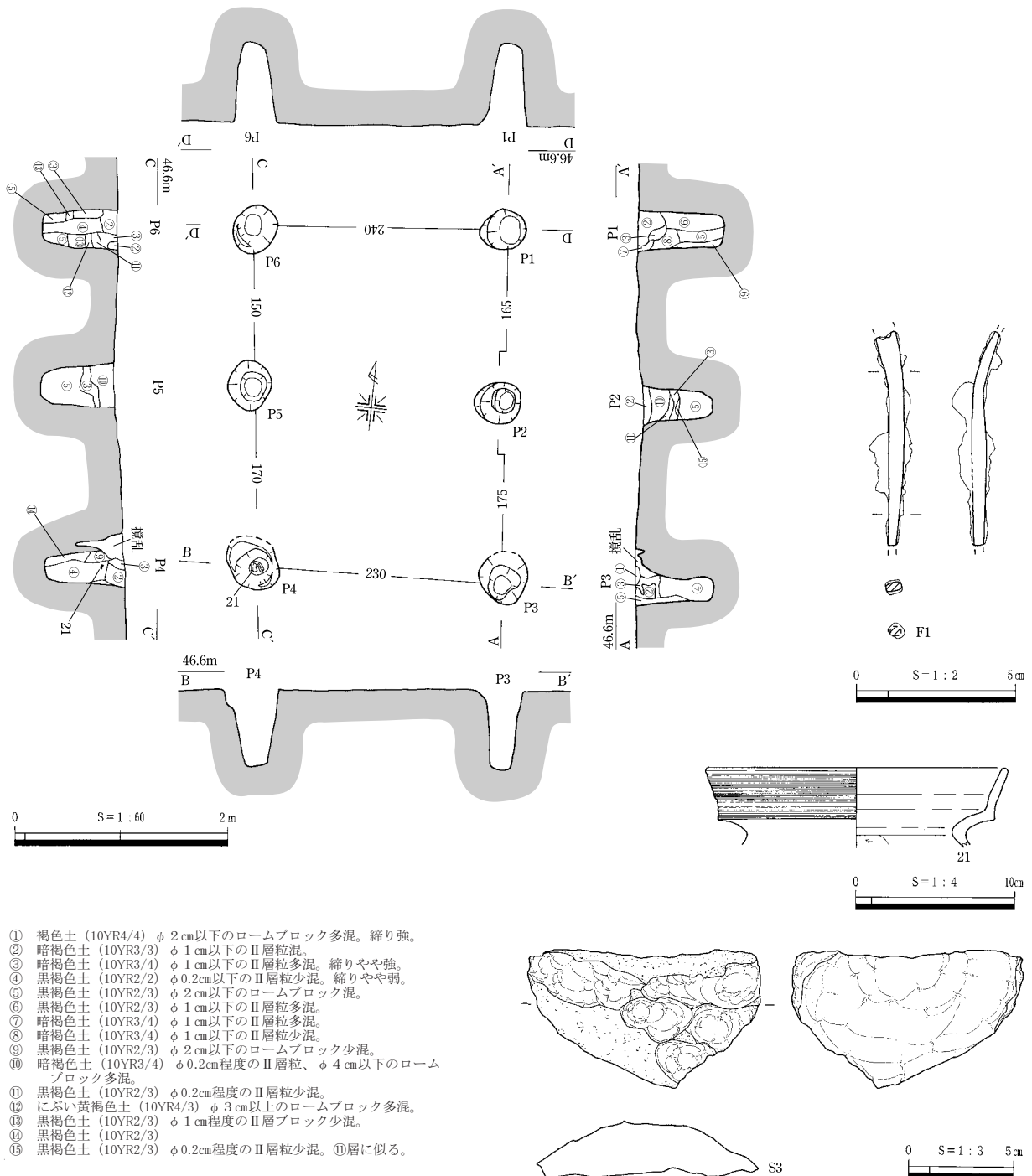
りに土を詰めている(⑦~⑪・⑬~⑲・⑳~㉑層)。P2・3に堆積する①層については、柱痕跡か柱の抜き取り痕かを判断することができなかった。P7は他の柱穴に比べて規模は小さいが、建物の中央に位置し、柱筋が比較的通る点、埋土の特徴が類似する点から本遺構に関連すると判断した。

本遺構から遺物が出土しておらず、埋没時期は不明である。

SB3 (第15図、表12、PL.8・9)

P6・7グリッド、標高47m付近に位置する。表土下、II層上面で検出した遺構である。

建物の主軸は、前述のとおりSB2と軸がほぼ揃っており、等高線に並行するようにN-33°-Wをとる。桁行1間(3.8m)、梁行1間(3m)の建物で、平面積は8.8㎡を測る。側柱はP1~4の4基である。



第13図 SB1 及び出土遺物